上越市安塚区細野集落での福祉文化現場セミナー開催の経緯

日本福祉文化学会理事・総務委員長　渡邊　豊

当初、春のゴールデンウイーク期間中に開催する予定であったが、コロナ禍の影響により延期とし、感染症対策を行ったうえでこのたびの開催となった。

今回は、日本福祉文化学会会員（新潟福祉文化を考える会会員）とロフォスの会会員による合同セミナーとなった。

ロフォスの会とは、神奈川県葉山町にある全国社会福祉協議会の研修施設「ロフォス湘南」から名付けたものである。1999 年から地域福祉権利擁護事業（現日常生活自立支援事業）がスタートした。事業開始当時、全国で事業の実務を担う専門員の宿泊型研修がロフォス湘南で行われ、新潟県からは長谷川悦子さん、神保みゆきさん、山﨑絵里子さん、渡邊豊が参加した。4 人とも当時は社会福祉協議会職員であった。共に研修で学んだ記念に、そして事業の発展を願って 4 人で「ロフォスの会」を結成し、4 人とも現在は社会福祉協議会を退職しているが、現在まで 20 年以上にわたり交流を続けており、昨年秋に、上越市社会福祉協議会安塚支所に勤務経験のある山﨑絵里子さんが世話役となり、上越市安塚区細野集落の六夜山荘で交流会を行った。地元の人達との交流がたいへん有意義であり、参加した渡邊豊は、今度は日本福祉文化学会の福祉文化現場セミナーとして会員とともに細野を訪れたいという思いを強くし、このたび、日本福祉文化学会とロフォスの会との共催による福祉文化現場セミナーが実現することになった。

これから日本福祉文化学会（新潟福祉文化を考える会）会員 3 人、ロフォスの会会員 3 人による感想を紹介する。

豪雪地の夏を訪ねる福祉文化現場セミナー in 上越市安塚区細野集落（報告）

日本福祉文化学会北陸ブロック理事　五十嵐　真一

1　セミナーの概要

開催日時　令和 3 年（2021 年）6 月 27 日（日）13 時～15 時

会　　場　「六夜山荘」（NPO 法人自然王国ほその村運営の田舎体験交流宿泊施設）

講　　師　丸山　新　氏（現・NPO 法人自然王国ほその村専務理事）

参 加 者　9 人（日本福祉文化学会正会員 4 人、今後入会予定の 1 人、元会員 1 人及び新潟福祉文化を考える会（現在会員外）から 3 人）

そ の 他　コロナ禍におけるセミナー自体の小型化により、今回も参加者は県内在住者・定員 10 人と限定した中での開催となった。感染症対策としてマスク着用は勿論、

換気のためセミナー中は終始窓を開けていた。

2　安塚区細野集落の感想（一言だけ）

人口・世帯数及び若年層の減少、高齢化の進展、担い手不足による農地の荒廃等多くの中山間地域の集落が抱えているであろう諸課題に対応すべく細野集落では、早くから話し合いや先進地への夫婦同伴による視察研修をはじめ、住民総参加による集落づくりを継続しています。地縁、志縁、御縁を大切に、もの・人・情報・お金の流れをつくり出してきました。講師の話の中では、直接、福祉という言葉は使われませんでしたが、このような地域経営、実践や取組が集落住民ひとり一人の元気と行動につながり、集落を蘇らせる活力になっていったのではないかと考えます。そして限界集落化することなく今日も元気にいきいきとこの場所で生活できる。これこそが住民福祉ではないでしょうか。

その他細野地区の概要や当日の様子は、他の参加者の報告に委ねることにしたい。

福祉文化現場セミナー「豪雪地の夏を訪ねる（小さい村の元気な挑戦）」に参加して

日本福祉文化学会前理事・新潟福祉文化を考える会　関矢　秀幸

（峠越えでセミナーに向かう）

柏崎市から会場の安塚町までは、いくつかのルートがある。今回は五十嵐真一理事、五十嵐勝会員と私３名で、あえて峠越えで安塚へむかった。柏崎と柿崎をつなぐ、「小村峠」を上り、柿崎ダムをとおり、吉川町へ、そこから左折すれば安塚町までは一本である。「小村峠」を越えるのは十数年ぶりである。平成 15 年に安塚町と福祉文化学会との共催で開催した「福祉文化現場セミナー(一泊二日)」で何回か峠越えをして打ち合わせに向かった日々が懐かしく思い出される。我々が当時福祉のキャンディーズと言っていた、一番ケ瀬康子氏、大熊由紀子氏、村田幸子氏のそろい踏みであった。当時の記録集を散逸してしまい、また、合併で安塚町も上越市に編入されたことから、再度の資料収集は難しくなった。何かの機会に再見したいものである。

（棚田がお出迎え）

細野集落は、上越市安塚区北部の山間部に位置し、周囲を棚田で囲まれたのどかな集落である。近隣集落から山一つ越えたところにあり、里山の景色が広がる自然豊かな土地である。多い年には３メートルを超える雪が積もる豪雪地帯である。

わたくしも田舎の人間であるが、このような山間地で、毎日の除雪作業など考えただけでも難儀である。ここで暮らしていくには、ある程度の覚悟が必要ではないかと感じた。案の定昭和 50 年代初めには、過疎化・高齢化による棚田の担い手不足、耕作放棄地の問題が深

刻化していた。私も稲作農家の端くれであるが、田んぼという田んぼ周辺には雑草がなく、畦畔も綺麗に整備されており、ビックリしてしまった。月複数回の除草作業で棚田の景観を守っている細野集落に大きな拍手を送りたい。

(小さい村の元気な挑戦)

年々人口・世帯数の減少、転出、若年層の減少、高齢化、担い手不足、農地の荒廃化が進み深刻となってきていた。このような状況下で、このままでよいのか？。内心集落のみんなが思っていたとのことである。そこで、リーダー格の丸山新さん(現・NPO 法人自然王国ほその村専務理事)の呼びかけで、成壮年が集まり、酒を酌み交わし、愚痴や不満、言いたいことをいい、自分を語り、夢を語り、細野を語ろうと、住民総参加の「あじさいクラブ」を設立し、村づくりの一歩がはじまったとのことである。談義を重ねる中で「ここで生きていくには、現状から抜け出し、価値観を共有し、みんなの気持ちが変わらなければだめだ」と一人の思いが二人に、そして三人へと重なり繋がっていったとのことである。まず、始めたのが、年 2 回の県内外の先進地視察。この研修の大事な約束事は、「夫婦同伴参加」の原則。視察を繰り返すうちに、細野よりさらに劣悪な条件の中で集落が一体となって一生懸命に取り組む姿勢に、細野の皆さんも、行政に頼らず地域が主体となる生き方を学んだということである。

見て、聞いて、考え、会合を繰り返すうちに、「俺たちにも何かできる」という気持ちが互いにわいてきた。「おらも何かやれんか」と意識改革に目覚めた平成元年に満を期して「自然王国ほその村」が設立されたとのことであった。

(逆転の発想～みどりのほその春の祭典～)

細野集落は、年々人口流出はとまらない、農業にたよるしかない一方だ。生活を豊かにするには、「働く場づくり」「所得につなげる」がポイントであった。そんな中で、残雪残る初春に山菜の時期となり、ふさぎ込んでいた住民の気持ちも明るくなった。その頃は山菜ブームであり、集落では外部からの山菜取りに困り果てていた。「どうせ採られるなら、山菜取りをメーンに全山開放し、集落事業として取り組んではどうか」との逆転の発想から、「自然王国ほその村」の手作り交流イベントとして「みどりのほその春の祭典」が実施された。女子衆は山菜弁当、たけのこ汁づくり、など男衆は山菜取りのガイドや受付など集落総出でもてなしたとのこと。青空市場では、笹団子、木工製品が飛ぶように売れ、すぐに品切れとなった。その後評判がいいなら、「商品化」を考えようとなった。

(かあちゃんの家と工房ほその)

春の祭典も定着し、何もかもやれると自信がついた平成 6 年に、笹団子、おこわの加工施設「かあちゃんの家」を作り、リタイアした大工、かやぶき職人であるじいちゃん達は、往年の技術を活かし、地元の材料を用いて、茶たく、お盆、ベンチ等木工製品、をつくる「工

房ほその」を設立した。その諸費用の 2 割を生産に携わる人たちが負担したとのことであった。

(細野集落の交流拠点「六夜山荘(ろくやさんそう)」の建設)

交流が盛んになるにつれて、来訪者からは「ゆっくり、細野に泊まりたい」という要望が出てきたとのこと。これに呼応し、体験交流施設「六夜山荘」を旧安塚町が建設し、細野集落の生産組合が独立採算で自主運営することになった。赤字が出ても行政は補填しない。すべての責任とリスクを集落が負う仕組みにはビックリ。

給与賃金は働いた時間に合わせて支払うシステムを採用し、おかみさんが調理人を手配するなど、宿を切り盛りし、男衆は経理や宿直を交替で行った。まさに、「かあちゃん頑張る、とうちゃん踏ん張るであった。」

順調に経営されてきた、「六夜山荘」であったが、やはり、 昨今のコロナ禍の影響で、経営は厳しい状況とのこと。我々も、コロナが落ち着いたら、安塚セミナー、細野集落を巡るイベントなどを企画し六夜山荘に宿泊したいものである。実は数十年前に、有志数名で宿泊し、夜の料理もごちそうになり、大変満足したことを思い出した。

(細野集落の所感)

リーダー格の丸山新さんが「自然王国ほその村」を設立したころは、まだ人口 200 人を超え、50～60 世帯くらいの集落であった細野も、いまでは、15 世帯 40 人程度の小さい集落になったとのことである。15 世帯というと私の町内会と同じであり、とてもじゃないが、細野と同じことはできないであうと思ってしまう。しかし、「何かをしなければならない」「ここで生きていこうという」気持ちの醸成はできると考えている。

やはり、細野集落のこれからの課題は、高齢化が進む中、若い世代にどうやってつないでいくか、他からの人材導入も必要か(現在地域おこし協力隊員がいる)など必要であろう。細野集落の挑戦はまだまだ続き、我々も細野に学んだことを、自分の町内会でいかせるみことは活かしていきたいものである。

おみやげに「かあちゃんの家」の笹団子を買ったが、おいしかったなあ～。今度は赤飯、山菜おこわ、も買いたいものである。ちなみに、安塚ゆきだるま物産館でも販売しているとのことである。

(附録:豆知識)

六夜山(ろくやさん)

細野集落を見下ろす「六夜山(ろくやさん)」の山頂には薬師如来が祀られており「六回お参りすると願いが叶う」という言い伝えがある。その言い伝えに由来した宿が「六夜山荘」である。細野集落唯一のゲストハウスには、そんな願いが込められていたのであろう。

自然王国ほその村の福祉文化現場セミナーに参加して
～上越市安塚区細野集落の挑戦～

准看護師　出羽　秀輝

６月７日、渡邊豊さんの誘いで、自然王国ほその村へセミナー参加することになる。
待ち合わせは「渋谷で５時」ではなく、新潟ユニゾンプラザで８時３０分だった。
私の車で行くことになっており、同乗者には長谷川悦子さんと渡邊豊さんだ。
長谷川悦子さんとは初対面だったので挨拶をかわして、いざ出発。
コロナワクチンの話などで盛り上がりつつ、高速道路にて新潟西インターから米山サービスエリアで休憩して柿崎インターにて降りる。
集合時間よりだいぶはやく上越に着いたため、途中の道中を散策することになり、長谷川悦子さんが近くの喫茶店をググってくれて行ってみたらビックリ！
そこは古民家である林富永邸を活用したおしゃれな喫茶店「CAFE HAYASHI」
清和源氏の流れをくむ家柄であり、中には勝海舟や犬飼毅の書が飾られており感動した。
そこであんみつとブレンドコーヒーをいただき、俄然やる気を出す。
その後、集合場所である六夜山荘に無事に到着し、柏崎チームとキャンディーズ(越後の美女三姉妹）と合流して早速昼食へ。
素材を活かした焼き鮭やなめこの味噌汁、山菜等とてもおいしくご飯もおかわりするほど。
お腹も満たされたところで、セミナーが始まり、まずは自治会長である志賀一男さんの挨拶。その後丸山新さんから自然王国ほその村の取り組みについて説明を聞く。
４０年前は５５戸、２００名いた人口が現在では１５戸３０名となっている。
その４０年前、昭和５４年に少子高齢、農地などの問題が浮かび上がり、酒を酌み交わしながら言いたいことをいって住民総参加の「あじさいクラブ」を結成した。
そこで驚いたことは夫婦での先進地視察研修や講演会を毎年実施して意識改革したことだ。この夫婦で研修にいくということは男女共同参画をすでに行なっていることになる。
そして「１００回聞くより１回視察したほうがいい」という丸山新さんからの言葉や、何度も視察していくことで先進地の取り組みを肌で感じることができ「俺ん所でもやれる」気がしたという意識改革がうまくいった好事例になっている。
平成元年には「自然王国ほその村」を設立し、「みどりのほその春の祭典」という山菜取りツアーを開催することで、やればできるという自信や自己効力感につながった。
その気持ちになれたのは、パンフレットをはじめ、ほその村全員で手作りをし、それぞれの役割をしっかり果たせたという充実感からだと思った。

その後、平成６年には「かあちゃんの家」を開き、笹団子などの製造販売をして雇用を生み出すことができ、食材を加工することでさらに食品に対する付加価値をつけて収益につなげている。

平成８年には「ほそのに泊まってみたい」「手作り料理が食べたい」という外部からの要望により「六夜山荘」の運営も開始された。

また、平成１６年「自然王国ほその村」を NPO 法人化することにより認知され、大学と年間を通じた交流も開始された。

今後の課題として担い手不足が懸念されており、地域おこし協力隊を受け入れて、新たな住民が増えるように考えている。その１つとして交通費を半分だすことで都会からきてもらうことを提案中であることや、グランピングも計画中とのこと。

今回の丸山新さんの話を聞くことで、「自分が動かなければ、人は動かない」「人・物・金があっても動かなければ循環しない」ことを教えていただき、私もその信念と行動力、継続力を見習って行きたいと思うし、今回の取り組みこそが SDG's だなと感じたセミナーだった。

福祉文化現場セミナー　豪雪地の夏を訪ねる～新潟県上越市安塚区細野集落～に参加して

山﨑　絵里子

私は、福祉文化現場セミナーに初めて参加しました。会場となった上越市安塚区は、縁あって 2011 年から 3 年、安塚区内で仕事をしていました。今回、細野地区を説明してくださった丸山新さんはその当時町内会長でした。私は丸山新さんから町内のこと、また安塚の地域のことを教えていただいていました。そして今回のセミナーで細野集落の地域づくり活動について丸山新さん、町内会長の志賀一男さん、六夜山荘支配人の大日向義一さん、地域おこし協力隊員の林克彦さんからお話を伺い、新たな発見や感動をたくさんいただきました。

私がお話を伺った中で感銘を受け、感動したことを感想として述べます。

細野集落は昭和 55 年から平成 25 年の間に 34 回の夫婦での視察研修をしてこられたことです。同じ場所を見てもそれぞれの感じ方や考え方はちがう、視察研修に夫婦で参加することにより夫婦で話し、集落で語り、私たちにもできることがあるんじゃないかという意識から実際に行動し、現在も集落自立の道を続けていることです。

考え方や価値観の違いをはじめから認めてその違いを同じものを見ることで語り合える場を作られた細野集落の皆さんにとても感動をしました。

細野集落では、ひとり何役も役割を持っており、年を重ねても健康で過ごしています。志賀一男町内会長さんが何か行事があると誰が何をすると細かく決めなくてもそれぞれ行事

に取り組んでいるんですという言葉を聞き、日々の暮らしから培われた信頼関係が織りなすと感じてとても温かい気持ちになりました。

草刈りが日課という言葉がありましたが、細野集落の景観の美しさは、百聞は一見に如かずです。これから夏に向けて六夜山荘の宿泊施設を便利に活用して気軽にグランピングできるようにしていくなど、細野の自然を存分に満喫することができそうです。

セミナー前に予め予約した昼食をいただきました。ふきなどの山菜や棚田で収穫したお米で炊いたごはん、お野菜をふんだんに使った生春巻きなどとても美味しかったです。笹だんごは最高でした。

セミナー参加者との束の間交流、大変充実した半日でした。現場セミナーは大変貴重な経験と感動で心豊かな時間でした、ありがとうございました。

豪雪地の夏を訪ねる　福祉文化現場セミナーに参加して

長谷川　悦子

新潟県上越市安塚区細野にある六夜山荘で開催された福祉文化現場セミナーに参加させていただきました。

昨年 11 月、にいがたロフォスの会上越地区代表山﨑絵里子さんの企画で同地を訪ね、自然王国ほその村のあゆみに感銘を受け、地元産の食材を使った美味しいお食事・笹団子に大満足で帰ってきたのでしたが、今回緑濃い細野を再び訪れることができました。

ほその村は今から約 40 年前、集落の衰退に危機を感じていた住民たちが思いを語り合う中で、新しい村づくりに挑戦しようと決意し、全村民参加のもと 1989 年（平成元年）「自然王国ほその村」を設立、豊かな自然を活用したイベント「みどりのほその春の祭典」「キャンドルロード」などの開催、細野生産組合による笹団子やおこわの販売（かあちゃんの家）、木工品製造販売、コシヒカリオーナーの受け入れ、H8 年完成した交流体験施設「六夜山荘」の運営など様々な事業を展開されています。平成 16 年「NPO 法人自然王国ほその村」となった現在は、大学との交流や令和 2 年地域おこし協力隊の受け入れを通して、この地域の支えあいや協働・共有の福祉文化を伝え、美しい棚田を残していこうとさらなる計画を進めておられます。

講師の志賀一男さん、大日向義一さん、丸山新さんからそれぞれの立場で現状と課題等伺いました。新たな課題はあるが、これまでのご自分たちの活動や取り組みに満足し、ほその村に誇りを持っておられることが感じられました。今回特に心に残ったのは、丸山新さんの「村民の一人ひとりが自分の役割をしっかりわかっているから、どんな状況でもスムーズにいくんです」という力強いお言葉でした。それは講師お三方がそれぞれ発言されているとき、決して他の方が口をはさむことなく、静かに敬意をもって耳を傾けている様子からも伺

えました。深い信頼をもって協力しあってきたことがわかりました。「一人ひとりが自分の役割をしっかりわかっている」・・ことは孤立しないということです。他者を尊重するとともに、さりげなく目を配りながら必要な時には手を貸すことができる、いつでも助け合えるということです。これが地域福祉の原点だとあらためて気づかされました。そして何よりも村民の皆さんのほその村を愛してやまない思いが、歴史とともに築かれてきた文化を守っていくことを学んだ良い機会となりました。

今回も美味しいお料理、笹団子でお腹を、また福祉の学びで頭と心を満たしてくださったほその村の皆様に心から感謝いたします。また、お知り合いになれた参加者の皆様、大好きなロフォスのメンバー、企画運営の日本福祉文化学会の皆様ありがとうございました。そして今回細野までレモンイエローの愛車に同乗させてくださった出羽秀輝さんに Special Thanks を申し上げます。

上越市細野集落　福祉文化現場セミナーに参加して

神保　みゆき

JR 信越線柿崎駅で電車を降りると、旧知の山﨑絵里子さんが迎えに来てくださる。いつも変わらぬ笑顔に感謝。梅雨空だが、瑞々しい緑の野山路のドライブに心癒されます。会場の六夜山荘には、既に懐かしいお顔の参加者が到着されており、さっそくレストランで美味しい昼食。地域の女性たち、地域おこしメンバーの男性が働いています。

私が細野を訪れたのは実は 3 回目。2018 年春頃、山﨑絵里子さんから「みどりのほその春の祭典」を教えていただき夫と初めて参加し、山菜採りの後、広場で食事、交流を楽しみました。住民、学生など多くの参加者数に驚きました。また 2020 年秋は、ロフォスの会（この会の説明は省略）のメンバーで訪れ、リーダー格の丸山新さんのお話を初めてお聞きし、自然を愛し、住民が自ら動く取り組みに感心しました。

さらに今回は、丸山新さんはじめ、地区会長志賀一男さん、六夜山荘の支配人大日向義一さんから、「NPO 法人自然王国ほその村」の歴史や歩み、今後の思いを改めてお聞きしました。

以下その内容の一部です。

〇細野地区の歴史。700 年前、足利尊氏、新田義貞。松之山街道。宿場町であった。

〇六夜山荘は、六夜山にちなんで名前をつけたこと。春夏秋冬、風光明媚の土地柄。
訪れる人たちが宿泊でき住民と交流できる場所がほしいとの願いを実現した。

〇細野地区の現状は、15 戸で 30 人の集落。中学生 2 人、高校生 1 名。10 人が働いている。高齢化。月 1 回夜にこにこサロンを開催。参加者 15 人で、90 歳以上 3 人。大切に

していることは、みんなが地域の中で役割を持つこと。歳をとっても健康であること。
・あじさいクラブ。夫婦そろって活動すること。県内外の地域おこしの研修視察。女性の起業「かあちゃんの家」笹団子の工場販売（平成６年～現在に至る）。
そのキャッチフレーズは、「母ちゃん頑張れば父ちゃん踏ん張る。」
〇財政と評価
・付加価値をつくり、高めること。
・地産地消（平成１６年～NPO 法人化）モノ・ヒト・カネが動くこと。
自分たちが動かなければ、人も動かない。地域の自立を目指している。

現在はコロナ禍での影響も大だと思いますが、困難に対しても住民が常に考え行動する姿が強く印象に残りました。私がいま地元でやっている福祉会活動にもいくつかヒントをいただきました。本当に貴重な機会をありがとうございました。
帰りに買い求めた笹団子は、皆さんのお話とお顔を思い浮かべながら味わいました。

上越市安塚区（東頸城郡安塚町）と日本福祉文化学会のこれまでとこれから

日本福祉文化学会理事・総務委員長　渡邊　豊

日本福祉文化学会前理事関矢秀幸さんが記しているとおり、当時の東頸城郡安塚町が上越市に合併する前の 2003 年 11 月 8 日～9 日に、日本福祉文化学会が主催者となり「地域福祉フォーラム in 安塚」を開催した。参考までにプログラムを紹介する。

メーンテーマ「今自分にできること考えてみませんか―お互いさまのまちづくり」
町内めぐり「安塚ってこんなところです」
見学先　いきいきふれあいひろば（子育て支援センター、地域の茶の間「にこにこサロン」、学童保育）、在宅複合型施設「やすらぎ荘」、ボランティアセンター、やすづか自由学園、高齢者共同住宅（グループリビング）
寸劇「おらがまちの支え合い」
基調講演「地域における福祉文化の創造」日本福祉文化学会会長　一番ケ瀬　康子
記念講演「世界から見た日本の福祉」大阪大学大学院人間科学研究科教授　大熊　由紀子
パネルディスカッション
助言者　日本福祉文化学会会長　一番ケ瀬　康子
大阪大学大学院人間科学研究科教授　大熊　由紀子
コーディネーター　日本福祉文化学会事務局長　馬場　清
パネラー　新潟市福祉公社まごころヘルプ室長　河田　珪子

島根県瑞穂町社会福祉協議会前事務局長　日高　政恵
ＮＰＯ法人スキップ理事長　丸山　芳郎
安塚町長　矢野　学
「頸城の地域福祉を支える活動」
コーディネーター　新潟青陵大学福祉心理学科助手　丸山　仁
発表者　吉川町「よしかわたすけあい」代表　加藤　正子
板倉町「板倉のぞみ会」会長　上石　孟
三和村「さんわ・ささえあい」会長　折笠　敏和
松代町「松代町ボランティアひだまり」会長　村山　寿平次
安塚町「やすづかボランティアセンター」事務局　小菅　久美子
特別講演「地域で支える高齢社会」ＮＨＫ解説委員　村田　幸子
まとめ　日本福祉文化学会理事　渡邊　豊
特別ミニギャラリー「佐藤伸夫・岡田清和二人展」
福祉車両展示会

また、会期中に一番ケ瀬康子会長は、安塚中学校を訪ね、中学生に向かってミニ講演を行った。その際、中学生に向かって「社会福祉の仕事とは、①人に喜ばれる仕事　②普通の仕事では会えない、すばらしい人に会える　③そういう人たちに会うと励まされる、自分のためになる」と、にこやかに穏やかに語った。その姿が今でも印象に残っている。

私にとっての安塚町の記憶は、今から 40 年近く前の日本社会事業大学在学時代に遡る。何かの授業で、当時の安塚町と同じ東頸城郡にある松之山町は、自殺者が多いと聞いた。その傾向として家族と同居する高齢者に自殺が多いと学んだ。

また、大学 3 年の 12 月頃に紀伊国屋書店新宿本店に行った。何の目的で行ったのかは覚えていないが、書棚を眺めていると、『ムラは語る』新潟日報報道部　岩波書店　と背表紙に書かれた本を見つけた。東京で新潟の本に出会い驚き、すぐに手に取り中身をあまり読まずに買い求めたと記憶している。今、その本が私の目の前にあるが、定価は 1200 円である。貧乏学生の私にとっては高額であるが、躊躇なく買ったのだろう。

『ムラは語る』を 1 日、2 日であっという間に読み終えたと思う。本のカバーには「全国でも有数の豪雪地帯として知られる新潟県松之山町。自然災害に加えて、転変する国の農業政策は農民の生活を侵蝕していく。だが、過疎化が進行する一方で、このムラに根づく人々の生活が力強く営まれてもいる。」と書かれている。

本の中の座談会「どうなる松之山」には、6 人の松之山町民が参加している。そのうちの一人、民生委員の石塚清丸さんを年末、新潟県北蒲原郡豊浦町（現新発田市）の実家に帰省する途中に訪ねた。その際に前泊した松之山温泉みよしや旅館で出会った教育長の本山一夫さんと、このお二人の自宅に次の冬の 2 月の 1 か月間お世話になり、雪堀をしたり、地元

浦田地区の人達と雪上運動会、うさぎ狩り、水車小屋での共同作業などで交流したりしながら、豪雪地松之山町の冬の生活を体験した。

当時、石塚清丸さんの自宅で石塚清丸さん夫婦と炬燵に入りながらテレビを見ていると、安塚町からダンプカーに雪を積んで東京の後楽園球場に運び、雪祭りを行う映像が流された。隣町の夢を見ているような活動の光景に驚いた。ちなみにこの雪祭りを終え、後楽園球場は東京ドームに生まれ変わったのである。

当時行われていた村おこし（地域振興）として、大分県平松守彦知事が提唱した「一村一品運動」や中国山地の「過疎を逆手にとる会」の活動に関心を持っていた私にとって、私の出身地の新潟県であり、生活を体験している松之山町の隣の安塚町で行われている奇想天外でスケールの大きい活動は、非常に衝撃的であったことを覚えている。

このことを丸山新さんに話したところ、当時、丸山新さんは安塚町役場の職員であったということである。

このように 40 年前から個人的に安塚町に関心を持ち続けており、そして日本福祉文化学会主催の 18 年前の「地域福祉フォーラム in 安塚」、今回の「福祉文化現場セミナー」とつながってきている。

今後も継続して細野集落を中心に「福祉文化現場セミナー」などを行っていきたいと考えている。次回は、山﨑絵里子さんの協力を得て 11 月頃に行いたい。

六夜山荘での「グランピング」の取り組みについて、出羽秀輝さん、山﨑絵里子さんが紹介しているが、この取り組みが 7 月 19 日の新潟日報に紹介された。記事の一部を抜粋して紹介する。

「夏の山里でのんびりキャンプはいかが―。上越市安塚区細野でＮＰＯ法人が運営する交流宿泊施設「六夜山荘」は 20 日、豊かな自然に囲まれた山荘の一角で、手ぶらでキャンプを楽しめる企画を始める。テントなどのキャンプ用品を貸し出すほか、風呂やトイレ、食事も提供する。山荘関係者は「棚田が広がる美しい風景や星空を堪能できる細野集落に足を運んでほしい」と呼び掛けている。」

さらに、新潟日報ふれあいプレス「ふれっぷ」8 月号は、新潟県内の特産品・名産品特集で紹介している 42 品の中に「かあちゃんの家の笹だんご」を選んでいる。

このような、小さな集落である細野の大きな取り組みに注目していきたい。細野集落の人達と交流する中で学び、いずれはお互いに学び合う関係になっていきたい。細野集落の交流人口である一住民として、「新潟福祉文化を考える会」という表札を掲げる一世帯として、関わり続けていきたいと考えている。

次に、今回の細野集落での福祉文化現場セミナーで、新潟福祉文化を考える会の専属写真家として撮影した写真を紹介する。